



住基カードを手  
に入れよう！

---

---

猫屋雑猫

---

「は？」

差し出された書類に目を通していたボクは不覚にも、バカのような声を出してしまっていた。ボクが手にしている書類は俗に言う「住基カード」住民基本台帳カードを手に入れるための「交付申請書」である。

この交付申請書に顔写真を添付しなければいけないことは知っていた。ながらく散髪もしていない上に、もともと冴えない顔を持つボクの写真は自分でみるのも嫌になるような代物ではあったが提出するものとしては不備はなかったはずだ。ただ、本人確認が必要だから申請書に添えて提出するようにと書かれている物を見て思わず声が出ていたわけである。

## 1. 運転免許証

単独事故で愛車であった原動付自転車を配車にしてしまったので更新し忘れたまま五年の月日が経っている。

つまりボクが所持している運転免許証は偽物ではないが意味の無いものである。

## 1. 日本国旅行券

いわゆるパスポートというヤツだ。

生憎、いまだかつて飛行機に乗ったことさえないのだから所持しているはずがない。

## 1. 保険証

職を失って保険料を支払えないままなので所持していない。

## 1. 住基カード

そもそも、コレが欲しいから申請するのだ。

## 1. (その他)

その他.....その他ってなんだ。

申請書そのものは役所でなくても手に入ると聞いたから気軽にやってきたわけだが申請書を手渡してくれた同年代の女の子は困ったような顔をして笑っている。

この子に「その他」について訊ねる勇氣は持ち合わせていない。

とにかくボクが隕れるのは、この「その他」しかないのだろう。

そもそも、こんな面倒くさい事になったのは原因というのは些細な事である。  
長年愛用していた携帯電話が寿命を迎えてしまったのだ。  
電池は膨らんで熱を持つようになっていたけれど、なんとか使えるのだからと愛用してきた。  
愛用というか、そうするしかなかったのだ。  
現在のボクの職業を訊ねられたら、良く言えば「フリーター」で率直に言えば「無職」なのである。

大学を卒業して無事に就職できていたのも僅かな時間で

「不景気」という言葉を何度も聞きながらボクは定職を持たない身となった。

そんなボクの命綱とも言えるのが携帯電話なのだ。

とにかく、登録してある派遣会社からの連絡を受け取れなければ職にありつけない。

日雇いだろうが、数ヶ月の短期だろうが、なんでもいい。

ボロいアパートの家賃、光熱費、食費……ボクにとって最低限の生活を守るためには絶対に必要な携帯電話なのだ。

その携帯電話の電源が入らなくなって、どうしようもなくなって、一番安い機種を買うしかない  
と覚悟を決めた。

何処の会社がいいとか、どんな機種がいいとかはボクの選別基準にない。

ともかくボクには身分証明をするものがないのだから、ひやかしのようなふりをして契約に必要な  
手続きを尋ねる。

こうして簡単な手続きで安い携帯電話が手に入るなら何でもいいと考えていたわけだ。

ところが、やはり身分証明するものは不可欠だという。

数箇所の携帯電話販売店を回って異口同音に奨められたのが「住基カード」だったわけだ。

そして、先の問題に突き当たる。

運転免許証くらいは更新しておくべきだったと後悔しても遅いのだ。

今のボクに無いものは無いとしかいえない。

早く携帯電話を手に入れないとボクは職にありつけないのだし、余分な金銭を払う余裕など無い  
のも事実だ。

冗談でも、大袈裟でもなく、今のボクにとって携帯電話は命綱なんだ。

運転免許だの、パスポートだのを持っていたら、住基カードを作ろうとは思わなかっただろう。

保険証くらいは持っていたいが、不幸中の幸いというか病気には縁が無い。

だいたい病院というところは何だか陰湿なイメージがあってできるだけお世話になりたくない。

まあ、そんな諸々の事情があって払えない保険料を滞納したままなのだ。

つまりボクのような人間こそ必要だと思える住基カード様なのだが……あちらは簡単には来てく  
れないらしい。

もう電源が入らなくなった古い携帯電話が生き返ってくれないかと何度も試してみる。

そうやって、騙し騙し数年間使い続けてきたのだから今が寿命といわれても不思議ではない。

とっくに電池が液漏れして使用してはいけない状態なんだということくらい解っている。

解っていてもボクには諦め切れなかった。

納得が出来なかった。

よく解らない「その他」とやらの縋って、役所に行くのが辛かった。

それでも……派遣会社からの連絡を受けられなければボクは明日からの食事も考え直さなければいけないだろう。

主食＝水道水……？

ダメだ。

ここは納得できなくても役所に行くしかない。

係りの中年男性は「住基カード」という言葉を聞いただけでもとから見下したような視線にプラスして嘲笑を浮かべてくれた。

「それなら、あっちだよ」

そう言われて行った窓口の女性は丁寧だった。

ボクが言いにくそうにすると察してくれて「その他」への話を進めてくれたのだ。

「年金手帳を取ってきてください」

「えと、年金って……払っていませんけど」

女性は笑顔のまま特に驚いた様子も見せなかった。

この瞬間だけボクには女神に思えたほどだ。

「年金の支払い義務が発生した年齢、つまり成人の方なら支払いの有無に関わらず手帳は発行されます」

そうだったの？

だってさ、ボクらの年齢で年金を支払っても損するだけだとかいうヤツが多いから最初っから何も知らなかった。

まさに無知というヤツのせいでボクは落ち込んでいたわけだ。

勇んで年金手帳を発行してもらいに行こうとすると、先ほどの女神様の声が聞こえる。

「あの、住基カードは申請していただいてから最低でも三日後でないと発行できませんので！」

「！……あ……ありがとうございます……」

ボクはペコリと頭を下げた後、年金手帳を手に入れる手続きのためにトボトボと歩き出した。

慌てて面倒な手続きをしても、数日間は連絡不通となってしまう。  
その間に派遣会社からの信用が落ちることは確実だ。  
ガックリときたボクの視界に懐かしい物体が目に入る。  
今では珍しい存在となってしまった公衆電話に飛びついていた。  
これで派遣会社に事情だけでも説明しておこう。  
携帯電話を買えば、また新しい番号を連絡すると伝えておこう。  
だが、ダイヤルを押そうとした手は止まる。

「何番だっけ？」

携帯電話の電話帳に登録されている数箇所の派遣会社の電話番号をボクは覚えていなかった。  
携帯電話に慣れきったボクはメモするという習慣もなくなっていた。  
メモというのは、携帯電話のメモ機能だと思っていたくらいだ。

「ちょっと、ハローワークに寄って行こうかな」

ボクの気持ちと同じように今にも雨が降り出しそうな空を見上げながら役所を後にしたのだ  
った。